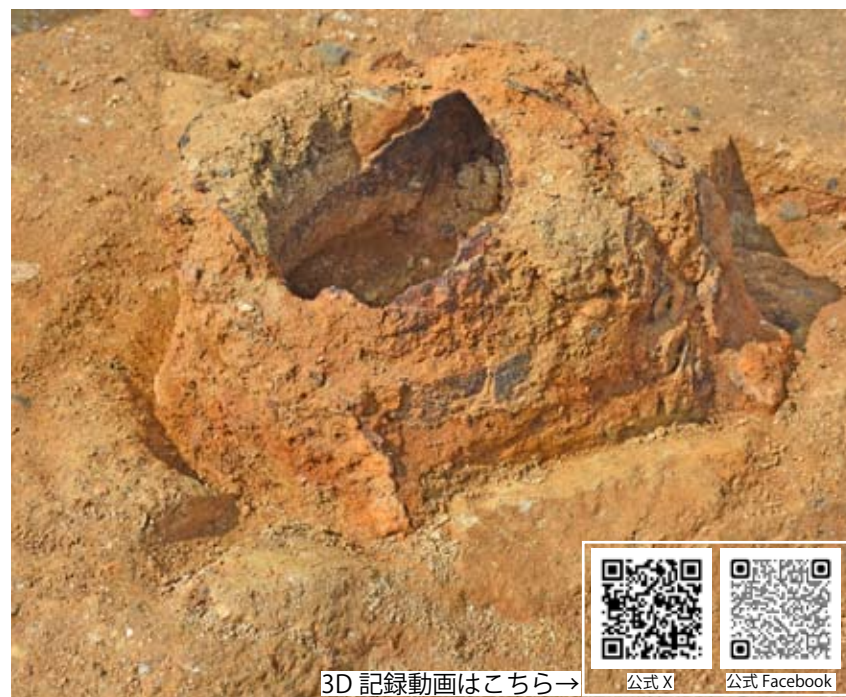


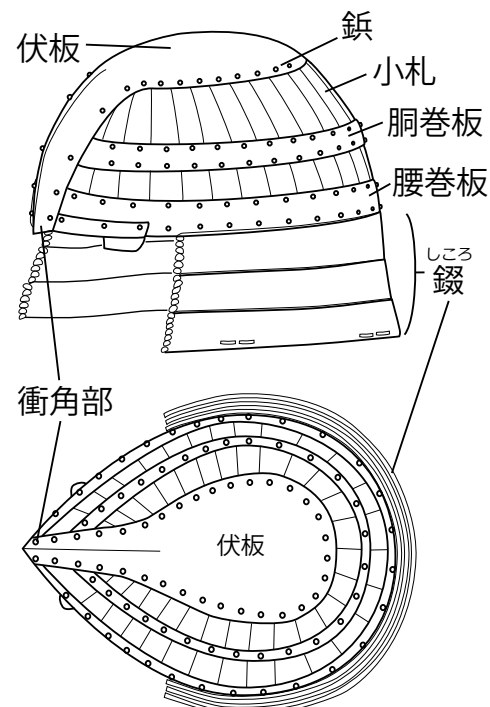
出土した甕は、「小札鉾留衝角付甕」といいます。大きさは直径約 20 ～ 25cm、高さは約 15cm です。縦 4 cm × 横 1 cm ほどの長方形の鉄板（小札）を重ね合わせ、横長の鉄板（胴巻板、腰巻板）と鉾で留める技術を使用しています。衝角とは、甕の前面側にある、船の舳先に似た尖った部位を示します。この甕は古墳時代中期を通して製作されており、5 世紀後半と考えている年代を裏付ける遺物の 1 つです。

小札鉾留衝角付甕は全国でも 30 例程度しかなく、三重県では初となります。甕としては、他型式を含めても県内 7 例目です。出土点数の少なさから、各地で量産できるものではなく、貴重なものであったことが窺えます。甕の詳細がわかれば、同型式の甕との共通点や差異がわかり、富士山 1 号墳の甕の特徴がみえてくるかもしれません。



3D 記録動画はこちら→

甕など（東から）



小札鉾留衝角付甕 模式図

富士山 1 号墳は鈴鹿市内の古墳の中でも大きい部類に入ります。市内の大規模な古墳としては、寺田山 1 号墳（高岡町 / 約 85m）や白鳥塚 1 号墳（石薬師町 / 約 78m）、愛宕山 1 号墳（国府町 / 約 66m）、西ノ野 1 号墳（王塚古墳）（国府町 / 約 63m）があり、それらに次ぐ規模の古墳の 1 つになります。

鈴鹿川下流域に限ると寺田山 1 号墳の次に大きい古墳です。造出がつき、陶質土器が供献されていることや葺石の整列から、丁寧な築造と埋葬が認められます。甕などの副葬品も加えると、鈴鹿川下流域の 5 世紀後半における有力首長の墓と想定できるでしょう。

未盗掘でもあり、今後の調査でさらに被葬者像に近づける可能性が高くなりました。来年度も引き続き調査をしますので、続報をお待ちください。

富士山 1 号墳（第 5 次）にて出土した鉄製遺物は、保存のため養生し取り上げを実施しました。速報展「発掘された鈴鹿 2025」にて、2026 年 3 月 14 日（土）～ 3 月 29 日（日）の期間限定で、梱包された状態のものを公開いたします。詳細は鈴鹿市考古博物館ウェブサイトをご参照ください。
URL <http://www.city.suzuka.lg.jp/kouko/>



公式ウェブサイト QR

鈴鹿市国分町

ふ し や ま ご う ふ ん

富士山 1 号墳 第 5 次 発掘調査 現地説明会資料

令和 8 年 3 月 14 日（土）
鈴鹿市文化スポーツ部文化財課

富士山 1 号墳は、鈴鹿川下流域左岸の台地上、鈴鹿川からは約 1 km 北に離れた、国分町に位置します。令和 2（2020）年度に地形測量を行い、令和 3（2021）年度から本格的な発掘調査を始め、今年度で 5 年目となります。

古墳から西へ 1 km には、伊勢国分寺跡や国分尼寺の推定地である国分遺跡、河曲郡衙跡とされる狐塚遺跡があり、古代伊勢国の中心地であったと考えられます。



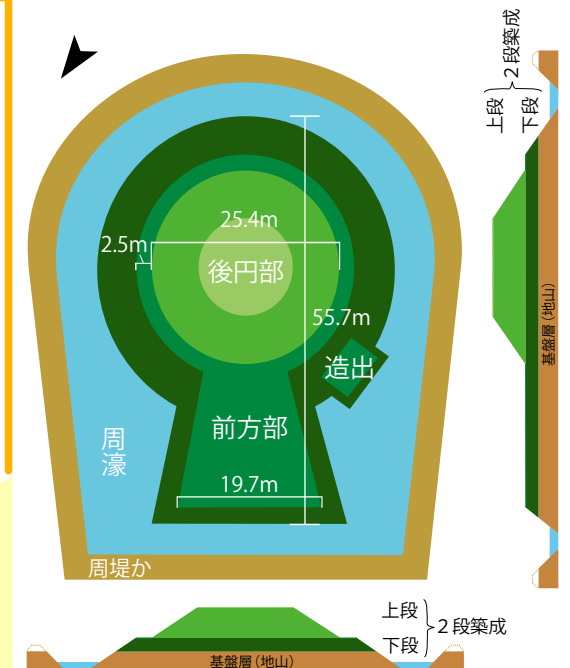
富士山 1 号墳位置図 (1 : 25,000)
国土地理院 1/25,000 地形図「鈴鹿」を加工



富士山 1 号墳全景（南から 2020 年撮影）

これまでの調査で、全長 55.7 m の帆立貝式前方後円墳であり、馬蹄形の周濠がめぐり、西側のくびれ部に造出がつくことが判明しています。また、後円部は 2 段築成で、上段の直径は 25.4 m、前方部上端幅は 19.7 m あります。令和 6（2025）年度の調査では、東側のくびれ部で非常に良好な葺石列がみつき、古墳が状態良く残っていることが明らかになりました。これらのような構造や出土遺物から、5 世紀後半（古墳時代中期後半）の築造と考えられます。

今年度から来年度にかけて、埋葬施設の位置や形状を把握することを目的とし、後円部の中心、いわゆる墳頂部を調査した結果、早速、立派な埋葬施設と副葬品である鉄製の甕などを発見しました。



富士山 1 号墳模式図

(第1次調査)

トレンチ3の西・北では周濠北西端の外側斜面を、同東では前方部の北西端の肩を検出しました。



(第2次調査)

造出の調査を実施し、上面が南北約6m、東西約4.5mの長方形であることがわかりました。平坦面には、北辺と南辺に埴輪列があり、中央部に陶質土器(須恵器壺)が供献されていた。埴輪の中には、甲冑形と推定される形象埴輪もみられました。



(第1次調査)

トレンチ1の調査で造出を発見し、令和4(2022)年度に詳細を調査することとなりました。また、周濠が馬蹄形であることがわかりました。

トレンチ2では、後円部が2段築成であることが判明しています。上段裾には良好な葺石がみられましたが、下段斜面は崩落しほぼ失われていました。



(第3次調査)

トレンチ7・8の調査で、前方部北端と、上端北東隅を確認することができました。トレンチ3の調査結果と合わせると、前方部先端の上端幅が19.7mであることがわかりました。



(第4次調査)

トレンチ9では葺石が非常に良好に残り、北側のくびれ部の位置を捉えました。

トレンチ10では後円部上段裾の葺石とテラス部(後円部上段裾から下段上端につながる平坦部)を検出し、トレンチ2の調査と合わせて、後円部上段の直径が25.4mであること、テラスの幅が2.5m前後ということがわかりました。



(第2次調査)

墳丘の南側にある微高地が陸橋(渡り土手)か否かを確認するためトレンチ5を設置した結果、近世の盛り土であることがわかりました。墳頂に築かれていた祠の参道の可能性が高いです。

トレンチ6では周堤の有無を確認しましたが、完全に削平されており、直接的な証拠はみつかりません。



第5次調査

令和6年度に、奈良文化財研究所協力のもと、墳頂部の地中レーダー探査を行いました。その結果、石室の反応は見当たらなかったため、石室を伴わない埋葬施設と想定し、面的に調査を開始しました。

約40cmほど掘削した結果、黄白色の粘土の筋と、青などを確認しました。粘土は胃の下にも敷かれていることなどから、粘土槨をもつ埋葬施設であると判明しました。

埋葬施設を横断するように断ち割ったところ、粘土は緩いU字状になっていました。最終的な判断は来年度になりますが、割竹形木棺と推定されます。また、木棺の下に撒かれる朱(魔除けや防腐のために用いられたとされる)が鉄製遺物の上に僅かに乗っていたため、粘土→胃→朱→木棺の順で構築されたと考えています。この順番から、胃は木棺の外に副葬された可能性が高いと思われます。

検出した胃は脆弱なため、大きく土を残したまま取り上げたので、詳細はこれからとなりますが、胃とは異なる部位が含まれる可能性もあります。



トレンチ13南区 埋葬施設(北から)



青などの取り上げの様子

- ① 胃の中に砂をいれ内部を保護します。
- ② シリコン樹脂を塗る前に、ビニルシートで養生します。
- ③ シリコン樹脂を塗り、完全に乾くまで待ちます。
- ④ ③が乾いたら、発泡ウレタン樹脂で固めるため、木枠で囲います。
- ⑤ 発泡ウレタン樹脂で固めます。最初は液体ですが、膨らんですぐに固まります。
- ⑥ ⑤の後に木枠を外し、地面から遺物を切り離します。裏返し、再び木枠を取り付けて、裏面からも発泡ウレタン樹脂で固めます。
- ⑦ 固まった後木枠を外し、天地を戻してから台座に乗せ、取り上げ終了です。